



**Data** 2023-106

監督：ジェイク・パルトロウ  
脚本：トム・ショヴァール／ジェイク・パルトロウ  
出演：ノアム・オヴァディア／ツァヒ・グラッド／アミ・スモラ  
テク／ヨアブ・レビ／トム・ハジ／ロテム・ケイナン／ジヨイ・リーガー

## 👁️👁️ みどころ

ヒトラーはあっさり自殺してしまったが、アルゼンチンに逃亡したアドルフ・アイヒマンは長い長い潜伏期間を経て、やっとイスラエルの諜報機関“モサド”に逮捕された。その追及ぶりや、アイヒマン裁判の姿は次々と映画化されてきたが、死刑の執行や遺体の処理は全く知られていない。

他方、人口の9割をユダヤ教徒とイスラム教徒が占めるイスラエルでは、律法により火葬は禁止！すると、死刑が執行されたアイヒマンの遺体は、誰が、どのように処理したの？そんなマニアックな(?) テーマに絞った本作の監督は、美人女優グウィネス・パルトロウの実の弟であるジェイク・パルトロウだ。原題を『JUNE ZERO』、邦題を『6月0日 アイヒマンが処刑された日』とする本作の切り口の巧妙さと面白さは、群を抜いている。

1948年に建国されたイスラエルの動静は、中東の安全保障戦略上、極めて重要だが、“3種類”のイスラエル国民とは？そんな学習をしっかりと重ねながら、本作の問題提起をしっかりと受け止めたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■アイヒマンの逮捕と裁判は？死刑執行は？遺体処理は？■□■

アドルフ・アイヒマンを巡る映画は多いが、その中で最も有名なものは、『ハンナ・アーレント』(12年) (『シネマ32』215頁)。ナチス・ドイツの迫害を逃れアメリカに亡命した女性哲学者ハンナ・アーレントに期待された「裁判傍聴記」の内容は、アイヒマンがいかに極悪非道な男であるかを赤裸々に“実況中継”することだったが、そんな期待に反して、彼女は傍聴の結果を「悪の陳腐さ(凡庸さ)」と結論づけたから、アレレ、アレレ……。また、『アイヒマン・ショー 歴史を映した男たち』(15年) (『シネマ38』150頁)も、アイヒマン裁判を詳細に描いた映画だったし、さらに、『アイヒマンの後継者 ミルグラム博

士の恐るべき告発』(15年)『シネマ 39』101頁)では、「アイヒマン裁判」に続いて、「アイヒマン実験」なるものを勉強することができた。

他方、ナチス・ドイツの崩壊と共に、1945年5月1日に自殺してしまったヒトラーの最期は『ヒトラー～最期の12日間～』(04年)『シネマ 8』292頁)で有名だが、アイヒマンはパチカン発行のビザと偽名を使ってアルゼンチンに逃亡し潜伏生活を送ったため、その行方を必死で追ったのがイスラエルの諜報特務庁“モサド”だ。その追跡の姿は『アイヒマンを追え! ナチスがもっとも畏れた男』(15年)『シネマ 39』94頁)が詳細に描いていた。

このように、アイヒマンを巡っては、第1に逃亡するアイヒマンをイスラエルの諜報機関「モサド」が逮捕するまでの物語、第2に逮捕されたアイヒマンが起訴され、裁判で死刑判決が確定するまでの物語、の2つが主流だった。そのため、死刑判決が確定したアイヒマンに対して、如何に死刑の執行がされたの?さらに、その死体は如何に処分されたの?その点について触れた映画は、これまで存在しなかった。しかして、原題を『JUNE ZERO』、邦題を『6月0日 アイヒマンが処刑された日』とした本作は、誰がどうやってアイヒマンの遺体を火葬したのか、に注目した、かなりマニアック(?)な映画だから、まずはそのテーマに注目!

## ■■■イスラエル建国の事情と両極端のイスラエル国民とは?■■■

韓国や台湾をはじめ、近隣アジア諸国への関心が薄い日本人は、より複雑な中東やアフリカ諸国の情勢については基本的にチンプンカンプン。名作『アラビアのロレンス』(62年)を観れば、第2次世界大戦中にイギリスが中東やアフリカ方面において、如何に“二枚舌”を使っていたかが明白になるが、ナチス・ドイツが崩壊した後の中東において、1948年にイスラエルが建国されたのはなぜ?そこにアメリカの強力な支援があったことは有名だが、すると、アイヒマンを逮捕したイスラエルの諜報機関「モサド」はアメリカのCIAの指導を受けていたの?

本作導入部では、リビアから一家でイスラエルに移民してきたダヴィッド少年(ノアム・オヴァディア)が、父親に連れられてゼブコ社長(ツァヒ・グラッド)の経営する鉄工所に雇われるストーリーが描かれる。それはそれで理解できるが、そこには日本人には到底理解できない、さまざまな“深い深い事情”が横たわっているので、それについてはパンフレットの熟読が不可欠だ。

本作のパンフレットには、早尾貴紀氏(東京経済大学教授)のColumn「三つのユダヤ人グループの「イスラエル国民」」があり、そこでは、1948年に建国されたイスラエル国民は、①強い民族意識を基に、自らの意志でイギリス委任統治領パレスチナに入植し、そして統治者であるイギリス人および先住民と周辺のアラブ人との戦闘の末に独立を勝ち取ったイスラエル国民と②ホロコーストをなんとか生き延びた生存者として、イスラエル国民になった者、の両極端に分けられている。そのため、①の人たちは同じユダヤ人にあっ

ても、②の人たちに対して「収容所に送られる前に自ら移民しなかったのだから自業自得」「弱々しいダメなユダヤ人」として冷たい視線を送っていたらしい。

### ■□■第3種類のイスラエル国民とは？この少年がその典型！■□■

同氏のコラムは、さらに続けて「この対照的な二つのユダヤ人集団の相矛盾する物語およびその和解の話であれば、いくつもの批評や映画などで扱われてきた。」としたうえ、本作では、さらに異質な物語を有する「第三のユダヤ人集団」、つまり、国民統合に困難を抱える中東系ユダヤ人「ミズラヒーム」たちが多数登場していることを指摘する。しかして、本作の主人公として登場する少年ダヴィッドは、まさにこの第三の種類のイスラエル人なのだ。なるほど、なるほど。

このようにイスラエル国民には3種類(3つのグループ)があることがわかると、前述した「深い深い事情」の1つが見えてくる。それは、学校の授業中に、授業を中断してまでアイヒマン裁判の死刑判決に聞き入る教師の姿と、それに全く興味を示さないダヴィッド少年の姿との対比だ。この違いは、教師が第1グループに属するイスラエル国民であるのに対し、ダヴィッド少年は第3グループのイスラエル国民であるために生まれたもの。つまり、アイヒマン裁判に関する両者のスタンス(興味)に大きな違いがあり、アイヒマン裁判やその死刑判決に対する“思い入れ”が全然違うわけだ。なるほど、なるほど。

### ■□■設計図と共に小型焼却炉の特注が！その使い途は？■□■

アウシュヴィッツ強制収容所では大量のユダヤ人がガス室に送られたが、そんなに大量の人間を燃やす焼却炉は一体どうやって作ったの？それはともかく、遺体を土葬するのか、火葬するのかを巡っては、国や宗教によって、いろいろな考え方があつた。もちろん、今の日本では火葬だが、人口の9割をユダヤ教徒とイスラム教徒が占めるイスラエルでは、律法により火葬が禁止されており、火葬設備が存在しないらしい。ところが、アイヒマンの逮捕、起訴、死刑判決と、5月31日から6月1日の真夜中《イスラエル国家が死刑を執行する唯一の時間》の“6月0日”に絞首刑に処せられたこと、そして、その遺体は火葬され、遺灰はイスラエル海域外に撒かれたことは、“歴史的事実”として知られている。しかし、アイヒマンの死刑執行は、いつ誰の手で、どのように行われたの？そして、アイヒマンの遺体は、いつどのように火葬されたの？

本作は、それをテーマにした映画だから、かなりマニアック(?)だが、そんなテーマがストーリーの核心として登場するのは、ゼブコが、かつての戦友で今は刑務官をしているハイム(ヨアブ・レビ)から小型焼却炉製造の“特注”を受けるところからだ。設計図を片手にハイムが持ち込んできた、その“特注”が、アイヒマンの遺体を燃やすための小型焼却炉の製造だと聞いたゼブコはビックリ！さあ、ゼブコはこの特注を受けるの？ちなみに、その設計図はアウシュヴィッツで使われたトプフ商会の小型焼却炉のものだったが、そもそもゼブコの鉄工所にそんなものを造るだけの技術・能力があるの？ゼブコの決断は「ゴー！」だったが、それを聞いた従業員たちの間に大きな動揺が広がったのは当然だ。

平気でコソ泥をする、ある意味で不良少年（非行少年）のダヴィッドは、炉の掃除ができる少年を探していたゼブコ社長にとっては絶好だったし、トラブルが発生した取引先との喧嘩の処理でも、ダヴィッドは意外に有能な才能を発揮したから、これは予想外の収穫！左腕に囚人番号の刺青が残る板金工のヤネク（アミ・スモラチク）、技術者のズエラ、鶏形のキャンディがトレードマークのコロリコなど、気さくな工員たちもダヴィッドを可愛がってくれたから、今やダヴィッドは学校ではなく、鉄工所が最も居心地の良い場所になっていた。

特注の小型焼却炉を製造するためには鉄工所を挙げての結束（チームワーク）が不可欠だが、そこで建国の「英雄」であるゼブコが、そんな従業員の中から、一方でホロコースト生存者であるヤネクを指名して焼却炉の運搬と炉の操作を担当させ、他方でダヴィッドに焼却炉の製造をさせたのは一体なぜ。それについて、前記、早尾貴紀のコラムは「このことは、三つのユダヤ人グループのイスラエル国民としての統合を見事に象徴している。」と解説しているので、私たちはそんな「深い深い事情」についても、しっかり学習したい。

## ■監督は？原題は？監督の問題意識は？■

本作の監督はジェイク・パルトロウ。そう聞くと、どこかで聞いた名前を思い出す。それは、『恋に落ちたシェイクスピア』（98年）でアカデミー主演女優賞を受賞した美人女優グウィネス・パルトロウだが、パンフレットによると、1975年生まれのジェイク・パルトロウはグウィネス・パルトロウの実の弟らしい。本作のパンフレットには **Director's Interview** があり、その最初の質問は、「この作品を撮ろうと思った理由と、なぜこのタイミングを選んだのかについて教えてください。」だ。そして、その答えは、次のとおりだ。

私が第二次世界大戦とユダヤ人の歴史に深い関心を抱くようになったのは、父の影響です。第二次世界大戦とユダヤ人の歴史は、幼い頃から父とつながる「場所」であり、一緒に考え、議論を交わすテーマでもありました。イスラエル当局は、さまざまな法的・政治的な理由から、アイヒマンを絞首刑にしたあとに火葬する選択をしています。私は、火葬を行わない文化・宗教において、それが実行された事実に興味を覚えました。これがストーリー作りの発端です。情報はほとんど見つかりませんでしたが、リサーチを進めるうちに「アイヒマンの遺体を焼くための火葬炉が作られた工場で、少年時代に働いていた」という男性の証言に行き当たりました。『6月0日 アイヒマンが処刑された日』は、国家としての在り方を模索中だったイスラエルに移り住んだ少年の視点を通して、少年が新たな土地に適応し、自分のアイデンティティを見つけるために、さまざまな苦難や挑戦に向き合うところからストーリーが始まります。

他方、本作の原題は『JUNE ZERO』。「ジューン・プライド（6月の花嫁）」は有名だが、「JUNE ZERO」って一体何？それは『6月0日 アイヒマンが処刑された日』という邦題を見ればすぐにわかるが、なぜ処刑された日が6月0日だったの？それはいくら考えても私にはわからなかった。しかし、ジェイク・パルトロウ監督のインタビュー最後の

「タイトルの由来をお聞かせください。」に対する、次の回答を見れば、なるほど、なるほど・・・。

劇中に繰り返し登場するタブロイド紙があります。あの時代に実在した「シャルリー・エブド」紙、「プレイボーイ」誌、「ニューヨーク・ポスト」紙をかけ合わせたような、架空のタブロイド紙です。『6月0日』は、アイヒマンの処刑を報じたタブロイド紙の日付に由来しています。アイヒマンの処刑日が注目すべき記念日になることを避けるために編集者が発行日をJUNE ZERO（6月0日）としたものですが、それがかえって印象を強めることになっています。

本作の鑑賞については、そんなタイトルの意味をはじめとするジェイク・パルトロウ監督の問題意識をしっかり学習する必要がある。

### ■□■ラムラ刑務所の任務は？その緊張度は？死刑執行は？■□■

裁判中の被告人アイヒマンを収監しているのはラムラ刑務所。死刑判決が下れば、どうすればいいの？法を遵守し、宗教にも配慮し、遺族には決して遺体を引き渡さないようにするためにはどうすればいいの？そんな悩みを抱えながら、署長やイスラム警察捜査官ミハ（トム・ハジ）などの関係者は、さまざまな可能性を検討し、処刑直後にアイヒマンの遺体を署内で内密に火葬し灰にすることを決定したらしい。世界が注目する中、死刑の執行は万難を排して粛々と執行しなければならぬのは当然のこと。ナチスの残党によるアイヒマンの遺体奪還作戦はないの？報復のため、刑務所が襲われる危険はないの？そんな緊張感の中、刑務所全体に警戒態勢が敷かれたのも当然だ。そのため、刑務所内はピリピリした緊張感に包まれ、最前線で警護するハイムも神経を尖らせたが、そんな中、目の前の死刑囚アイヒマンは他人事のようにベートベンの『悲愴』を聴きながらタバコをくゆらせていたから、アレレ、アレレ・・・。

スクリーン上には、一方でそんな風景が映し出されるが、他方では取調官としてアイヒマン裁判に出席し、ホロコースト体験を証言したミハが、ユダヤ教会主催のツアーに招待された。ツアー中、自分が殺されかけたゲッター跡地で強い思いを胸に、参加者に過去を語り続ける風景が描かれる。このミハは、前述したイスラエルの3つの人種のうち2番目のアウシュヴィッツの被害者だが、どんな思いでアイヒマンの死刑と、その遺体の焼却処理に参加していたの？

### ■□■焼却炉造りの成否は？遺体焼却の成否は？■□■

私たち日本人は、肉親のお葬式の後、火葬場に赴き、焼却された遺体から遺骨を拾う作業を何度か経験しているが、火葬のないイスラエル人はそんな経験が全くないらしい。そればかりか、遺体を焼却することすら知らないのだから、いかに鉄工所を営んでいるゼブコでも、遺体を焼く焼却炉を作るのは大変な仕事だ。その参考になるのは、アウシュヴィッツで使われていたトプフ商会の小型焼却炉の設計図だけだから、その困難さはなおさらだ。死刑執行が迫る中、完成した焼却炉で動物の遺体を焼却してみると、アレレ、アレ

レ。完全に骨になっていなかったから、こりゃダメ！温度をもっと上げなければならないが、そのためには、何をどうすればいいの？

本来なら、ここでゼブコが経営する鉄工所での小型焼却炉製造プロジェクトは頓挫してしまうはずだが、本作ではそこからダヴィッド少年の才能が発揮され、見事にプロジェクト成功に至るので、それに注目！しかして、アイヒマンの死刑執行は如何に？遺体の運搬は如何に？焼却炉の燃え具合、温度具合は如何に？そして、その中に入れられた遺体の数時間後の姿は如何に？

## ■□■ダヴィッドVSイスラエル兄弟の名前にも注目！■□■

イスラエルと聞くと、私はモーゼの『十戒』(56年)を思い出す。流浪の民となったユダヤ民族の中で、もちろん“モーゼ”は有名だが、それ以上に有名で人気が高いのが、古代イスラエルで最も偉大な王とされている“ダビデ”だ。したがって、リビアからの移民に過ぎない少年を“ダヴィッド”と名付けるのはあまりに厚かましい。それは前述したゼブコのような第1グループのイスラエル人なら、とりわけ強く感じるはずだ。したがって、本作導入部は、父親に連れられたダヴィッドがゼブコの経営する鉄工所での面接にやってくるシーンから始まるが、それをダヴィッド=ダビデという名前に焦点を当てて鑑賞するのも一興だ。

さらに興味深いのは、ダヴィッド少年の弟には、イスラエルという名前が付けられていること。こりゃ、一体ナニ？前記、早尾貴紀氏のコラムによると、これは「統合と綻びを描くための意図的な設定であろう」と述べているから、なるほど、なるほど。そんな点からも、本作をしっかりと味わいたい。

2023 (令和5) 年9月21日記